気がつくと僕は故郷に帰る

朔太郎

1

『成田に向かう列車の中からもう旅は始まっている。ナリタニスト』

　何のこっちゃ、と僕は思った。何か格好良く書いたつもりのようだけれど、『帰るまでが遠足だよ！』というあの誰が言い出したかわからない遠足の度に誰かしらがしたり顔で言うセリフと似ていて(というか応用してるだけ)、読んでいるだけで少々恥ずかしくなるコピーだった。そもそもナリタニストって何だ？
　その他にも、『トラブルはトラベルにつきもの』や(いやいやトラブル何かに出来れば遭いたくない)、『遠い国が身近な国へ』や、『偶然の出会いが一生の出会い』など(これはまあマシかも)、中学生あたりに一般公募した人権標語のようなポスター•コピーがそこら中に貼ってあった。
　大体において、あの道路の節目節目に仰々しく掲げてある交通標語しかり、僕はこの手のやつがどうも苦手である。
　そんなことを一人でぶつぶつ言いながら、たっぷり2kmはあろうかという陸上競技場のトラックの合成ゴムのような床を延々と第三ターミナルに向かってぶつぶつと歩いた。てくてく。大げさに思うかもしれないけれど、電車を降りて飛行機の搭乗口まで本当に2kmはあるのだ。長い距離を歩かせることを見越して、合成ゴムの床にしているのかもしれない。
　兎にも角にも四国に向かう飛行機に乗ったわけだけど、CAさんが全員男性というのが何ともコメントのしようがない旅の始まりなのである。

　トラベルにトラブルはつきものなのだ。あれ、トラブルはトラベルに……だっけ？

2

　丁度大阪上空辺りで飛行機が突然揺れた。ジェットコースターか何かが急に下降したときに腰が浮いちゃうようなあの嫌な揺れ方だ。まあ何と言うか、(両手で)数え切れるほど飛行機に乗っている旅行スペシャリストの僕にしてみれば、もちろんそんな風に揺れることなんて日常的なことなんだけど(はいはい)、機長自らがアナウンスを使って「当機は順調に松山空港へ向けて飛んでおります(ご安心ください)」みたいにわざわざ言われると逆に信用出来ないよな、と思ってしまう。
「良かったあ、順調なんだって！」
「あー！ お兄ちゃんが私のお菓子取ったー！」とガヤガヤ話している後ろの親子連れには安心する材料だったようで僕も安心した。
　By the way(ところで), 通知表に『ひねくれたところがあります』、と書いてくれた先生は現在もお元気だろうか。心配しないでください。僕は相変わらずたっぷりとひねくれております。

3

　松山空港を出ると一気に身体中にまとわりつくような生温い嫌な空気が襲ってきた。雨は間断なく降り注ぎ、空気はサウナ室のように大量の湿気を含んでいた。
　僕は従兄弟が迎えに来るのを待っている間、マールボロのたばこに火をつけ辺りを見回した。前回来たときと何も変わっていないようだった。タクシーやレンタカーの送迎車が列を成し、土地特有の匂いがし、そこかしこから伊予の方言が聞こえてきた。目隠しをしててもわかる。ここは紛れもなく四国であり、僕の生まれた土地だった。

「ここをどうしようか迷いよってね」と彼は言った。インテリアに凝りだしRoomClipを始めた従兄弟だ。前回来たときと比べキッチンにはレンガの壁紙を貼り、サニタリーにはウッド•ブラインド、リビングのテレビ•ボードにブライワックスを施し、その後ろの壁には“すのこ”を掛け、そこにはインテリア?カタログやリメイク缶が置かれていた。
「そうやね」と僕は言った。「カーテンを何とかして、クローゼットは布で隠すといいよ。うん。それで、ソファとローテーブルもテレビ•ボードに合わせるといいかもしれない。あとは」
　そこまで言って、これじゃ全部じゃないかと僕は思った。アドバイスというより、自分の好みを押し付けているみたいだ。
「あとは、布だね、布」
　布さえあればインテリアは何とでもなるのだ。

4

　従兄弟の家には2匹の猫がいる。『よもぎ』と『あずき』。どうしようもなく和菓子が食べたくなる名前だけど、いま和菓子は無いし、猫たちを食べるわけにもいかないので僕は見つめるだけで我慢することにした(当たり前だけど)。

「誰かよくわからないけど」と“よもぎ”は言った。「あまり構わないでもらえると助かるわ」
　ふむ。でもそう言われると猫好きの僕としては逆にちょっとうずうずしてくる。
「まあ、そう言わないでさ」と言って僕は“よもぎ”を抱きかかえた。すると“よもぎ”はびくっと身体を震わせながら身をよじり、爪を尖らせ、口を大きく開けながら僕を威嚇した。「おっと、ごめんごめん、何か気に障ったかな？」
　“よもぎ”はそれには答えず僕の手の中からさっと降りた。しかし何処かに逃げるでもなく、ただその場で僕を見上げていた。まあ構うなと言われて敢えて構ったんだから仕方ない。しかし目の前に猫がいたら構わずにはいられないのだ。丁度それは『押すな』と書かれてあるボタンの前に立っているときの心境と同じだった。
　“あずき”の方はというと、とてもこちらが気になっているように見えたが一定の距離を保ちながらまん丸い目でやはり僕を見ているだけだった。そこには敵対心も親密な空気も無く、好奇心に片足を突っ込んでいるくらいの状態だった。片足の指の部分だけかもしれない。気にはなるけど

そこまででもない。話題作だとは聞いているけどわざわざ映画館に足を運ぶまでもないな、というくらいの好奇心だ。もっと簡単に言うと、少し小腹が空いたけど外は雨だしこのまま寝ちゃえばいっか、というくらいである。
　ううむ。余計わかりづらい。

5

　汽車の時間にうまい具合に間に合わなかった為、僕はいつもの駅近くのカフェで時間を潰すことにした。
　ハムとトマトのサンドイッチとアメリカン•コーヒーを注文したところ、「モーニング・セットが大変お得になっております！」と女性店員が言った。僕はモーニング・セットとはどんな内容なのか、と聞いてみた。しかし彼女はうまく僕の質問が飲み込めなかったようで、2cmほど首を傾け「500円です！」と言ってにっこり笑った。
「ええっと(サンドイッチが350円でアメリカン•コーヒーが250円で……)」
「モーニング・セットでよろしいでしょうか？」
「うん、いや、はいちょっと待っ……」
「モーニング・セット、ワンでーす！」と彼女は振り向いてキッチンだか何処かに大声で声をかけた。「では、500円に“なります”！」
　彼女は人の話を聞かないだけじゃなく、どうも500円にも“成る”らしい。もうどうにでもしてくれと僕は思った。
　5分ほどかかって出てきたモーニング・セットは、トースト1枚きりとやけに濃いコーヒーだった。

6

　76匹くらいのセミが鳴き叫んでいた。

　多くの墓地がそうであるように、寺の横にその墓地は併設されており、夏の深緑の木々に囲まれながらひっそりと訪問客を待ち続けていた。
　僕はやたら蚊が多い(2匹までは何とか数えた)水汲み場まで行き、つんざくようなセミの鳴き声を聞きながらバケツに水を汲んだ。そしてあらかた墓周りの掃除を終え、祖父、祖母、の順番に線香をあげていると、セミの鳴き声と鳴き声の合間にホーホケキョという聞き慣れた鳴き声が聞こえてきた。ウグイスだ。しかし、春の訪れにしては何とも季節外れだ。
「もしかして」とそのウグイスは言った。「いま、夏のくせにウグイス鳴いてらあ、って思いました？」
「……いや」と僕は言った。何なんだ。「うん、まあ確かに思ったかも。夏でも鳴くんだね」
　ウグイスは“くちばし”を2回ほどパチパチ鳴らし、ふう、と溜息をついた。

「夏にも鳴きますよそりゃ。別に春だけよいしょと起きて、ここいらでひと鳴きしたあと、じゃあまた来年まで寝よ寝よ、となると思ってたんですか？」
　そんなことは思ってないし考えてもない、という旨のことを僕は正直にウグイスに伝えた。
「気を悪くしたんなら謝るよ」と僕は言った。
「まあいいんですけどね」とウグイスは言った。「もう慣れちゃったといえば慣れちゃいましたし。いつもいつも夏ごろに鳴く度に、『あらあらうっかり屋さんのウグイスね。間違えたのかしら？』とか『変ねえ、この辺は夏でも鳴くのね』とか、毎回言われるんですよ。それで少々鳴き辛くなって……という訳でもないんですけど。でもねあなたーー」
　ウグイスはそこまで言って、コホンと咳払いをした。
「失礼。でもねあなた、外敵がいなけりゃそりゃあ私だってこんな腑抜けた鳴き方なんて水道の蛇口をきゅっと締めるようにぴたっとやめますよ。そりゃあ。だって何せ妻が子どもを育ててるんでね。家に無事に妻が帰って来れるように鳴き続けなけりゃ、今度は別の意味で泣くことになりますからね」
　ウグイスはそう言ってニヤリとくちばしをぴくぴくとした。ウグイスは笑うときはくちばしを広げ、ニヤニヤするときはぴくぴくとするのだ。
「そっか、じゃあ頑張ってね」と僕は言った。

7

「前回この説明会に参加したのはいつ頃ですか？」とジュエリー実演販売の男は参加者に向けて言った。何回も参加する奴がいるのかよ、と思ったがちらほら手が上がっているようだった。
「では、そこのサングラスの男性」
「ううん、前回は……」と当てられた彼は言った。「……前回はご、ろっぴゃく年前ですかね」
　……くだらない、と僕は思った。何処のどいつがそんなくだらないジョークを言ってるんだ？と辺りを見回すと、何のことはないそれは僕の父親だった。つまり僕の母親の旦那にあたる人である。実演販売の男も苦笑いだった。
“ご、ろっぴゃく年前”というフレーズを、ご、ろっぴゃく年前から彼は使っている。わずかな失笑と、多くの苦笑いの中、恥ずかしくて消えたい、と僕は思った。隣りにいる母親も同じような気持ちなのがひと目でわかった。こんな気持ちになったのは“ご、ろっぴゃく年”ぶりだろうか。苦笑い。

　ふぐ刺しツアーに参加したはずなのだが、気がつくと僕はこの宝石実演販売会場の椅子に座らされていた。要するにツアー代金を安くする代わりに、メイン会場までの道中で提携している企業や土産屋にツアー客を降ろし、それでマージンでも取っているのだ。普通の人なら買うこともないだろうが、うまく販売員に言いくるめられてふぐ刺しツアー代金より高額なジュエリーをほいほい買う客も少なくないようだった。ホワイト・パールやブラック・ダイヤモンド、肩凝りの取れる磁石。あとは何故か羊毛のラグ。「ムートンは空気中の湿気を…」云々。

空は快晴。海からの照り返しはまだ穏やかで気温もそれほど高くはなく、道路沿いにはオシロイバナやゼフィランサスが咲き並び、夏の匂いを街中に拡散していた。
早くふぐが食べたいなあと僕は思った。

8

旅客フェリーは定刻に三崎港から夜の海へと出港した。午後9時半。海からの潮風は、独特の匂いと湿気を帯びながら、餌を追い求めふらふらしている野良犬のようにあっちこっちへ吹きまわり、車の排気ガスやら生ゴミの匂いをそこら中から回収し、きっちりと訳のわからない匂いへ変化していった。
化学変化のことはよく知らないけれど、身体に良いものではないなあ、と思いながら僕は100円ライターでたばこに火をつけ大きく肺まで吸い込んだ。ごほごほ。
「身体には良くないよねえ」と言いながら昼間にも揚げ物をおかずに揚げ物を食べたばかりだったので、まあ乗り掛かった船みたいなものである。おかげで、ファミレス内で祭り騒ぎをしている迷惑な客を見ているときのような不快感が、胃の中でふつふつと湧き上がっていた。おまけと言ってはなんだけど、しっかり頭痛もセットでついてきた。抱き合わせ商品のようなものだ。

「ひどく痛むのかい？」と彼は言った。睡魔だ。面倒なときに面倒な奴がやってきた。
「まあね、それなりに」と僕は答えた。
「顔色も良くないねえ。泥の中で暮らしてたカエルみたいな顔してるよ。目も必要以上に大きいみたいだし」
目が大きいのは生まれつきだからただの悪口だよそりゃ、と思ったが、船は揺れるわ胃が不快だわ何だで面倒だから、そうかもしれない、とだけ答えておいた。
「歯切れが悪いねえ」と彼はポケットから何かを取り出し僕の前にコトンと置いた。それはコーン・ポタージュ・スープのようだった。
「コーン・ポタージュ・スープに見えるね」と僕は言った。
「そう、コーン・ポタージュ・スープだよ」と彼は言った。
「これは何だい？」
「何って？」と彼は言い、左で組んでいた脚を右に組み直した。「コーン・ポタージュ・スープの種類には疎いから、何って言われても困るんだけどね」
「いや、だから何でコーン・ポタージュ・スープを今出したのかを聞いてるんだよ」苛々するな、まったく。
彼はいまいちよく分からないという顔で僕の顔を覗き込みながら、「飲む以外の活用方法を教えてくれるとありがたいね」と言った。
何なんだ、一体。気持ちが悪いって言ってるのに飲ませるつもりかよ。しかし今これを飲んだら確実に戻してしまうな、と僕は思った。いや、待てよ。彼は自分で飲むのかもしれない。そし

て飲みながらあの濃厚な匂いを辺りに漂わせ、僕の気持ちの悪さを倍増させようという魂胆なのかもしれない。どちらにしろおぞましい結果には違いなかった。
「気持ちは嬉しいけど」と僕は言った。彼は必要以上にニコニコしている。「それを飲……」
『ご乗船のお客様へお知らせ致します。当フェリーは……港へ……間もなく……』
　僕の言葉を遮るように、船内アナウンスがタイミング良く流れてきた。もちろん僕はほっと胸を撫で下ろした。そして彼はいつの間にか僕の前から消えており、コーン・ポタージュ・スープだけがテーブルの上に残されてあった。
「持って帰れよ……」と僕はぼそっと言い、コーン・ポタージュ・スープの缶の中身をトイレに流し、空き缶をごみ箱へと捨てた。投げ捨てた。
　何処かから、ちっ、と舌打ちのような音が聞こえた気がした。

9

「よお」と僕は言った。
「やあ」とキリンは言った。首が短く、かわりにやたら長い脚が特徴なキリンだ。
「今日は暑くなるみたいだよ」
「それくらい知ってるよ。夏に寒いなんてことがあるかよ(気でもふれたか)。もっと有益な情報を教えてくれなきゃ」
「有益ねえ」と僕は言った。「そんなの知ったこっちゃないな」
　そんなの知ったこっちゃないのだ。
「ま、そう言うだろうと思ったけど」とキリンは言った。「新聞くらい読んだ方がいい。知ってるか？ 新聞にはあらゆることが載っているんだぞ。テレビの番組表から向こう一週間の天気(何と気温まで)、為替市場、全国の平均ガソリン価格、ドラッグ・ストアのセール情報、大相撲の勝敗、おまけに――」
「おまけに？」
「おまけに求人情報まで載ってる」
「そっか」と僕は言った。そっか。ふうん。
　目が覚めると周りには誰もいなかった。もちろん雲もなく、キリンもいない。最近よくこんな夢を見る。くだらない夢だ。そこには何かしらの動物がいて、一匹残らず僕をけなしていく。中には唾を吐きかけていくやつだっている。僕が何したって言うのだろう。次見かけたら聞いてみよう。
　つけっぱなしになっていたテレビのニュースからは、小型機が住宅街に墜落して3人が亡くなり、全国各地で猛暑日を観測し、街角では2リットルのペットボトルで水分補給をしている女性が映し出されていた。テレビも特に有益とは言えない情報を垂れ流している。新聞なんて尚更読んでいられないなと思った。

　僕は時計の針が昼を回ったのを確認してから、母親と姉とその息子の四人で"いとい"さんに会い

に行くことにした。"いとい"さんとはもちろんあの"いとい"さんである。輸入アンティークやヴィンテージ家具、雑貨、国内外からセレクトされた素晴らしい商品を扱っている店『so-ko』の"いとい"さんだ。僕は僕の家の近くにその店舗があれば恐らく毎週のように通っているかもしれない。そして、まいったなあまた来たの？ しつこいけん、なんて言われながらもしつこく通い詰めるだろう。だって、そんなの知ったこっちゃないのだから。というくらい素敵で落ち着く店舗なのである。カフェ・スペースなんかあったらたまんないんだろうなあ、とも思っている。

「お久し振りです」と今日も無償で笑顔を提供しながら"いとい"さんは言った。
「ご無沙汰してます」と僕は言った。まだ『また来たの？ しつこいけん』とは言われなかった。

10

　休暇が終わろうとしていた。晴れているのか曇りなのかよく判断が出来ない空模様で、暑いと言えば暑いし、寒い、とは言えないけどまあ汗をかくほどでもない、休暇の最終日には相応しい気温だった。
　僕はベランダに出てたばこに火をつけようと思ったがライターのオイルが無かった為諦めて椅子に座り、ぼおっと周りを眺めることにした。社会の縮図かのようにマンションのベランダからはこちらより高いマンションが見え、その向こうにはそれより更に高い山々がそびえ立ち、山の上には雲があり、その上にはオゾン層や電離層、大気圏を超えると宇宙空間が広がっていた(多分広がってる。見たことはないけど)。

「きみはハシブトカラスだね」と僕は言った。 そのカラスは頭の天辺から尻尾の先まで台風の夜のように真っ黒で、先ほどからじっとベランダの手すりの端っこで羽を休めていた。あまりに黒過ぎて目が開いてるのか閉じているのかよくわからなかったが、ちらっと顔をこちらに向けたのでどうやら起きてはいるみたいだった。「カラスの種類にはちょっとうるさいんだよね、僕って。まあひとくちにカラスと言っても色々な種類がいるから素人目には見分けがつかないんだろうけど、僕くらいになると無駄だよ、誤魔化せない。だからいくら身体が黒くったって意味がないんだ。白であっても同じさ、例えブルーでもね」
　僕はたばこを口に咥えたが、ライターの火のことを思い出しまた箱の中にたばこを戻した。
「じゃあ」と僕は言った。「きみは実はハシボソカラスだったとする。ハシブトカラスじゃなくてね。とするときみはベジタリアンということになる。ここまではいいかい？」
　カラスはまだじいっとこちらを見ている。
「ベジタリアンということは栄養素が不足して先天的な障害確率が雑食者に比べて格段にアップするんだ。更には常に空腹のままその辺をうろつくことにもなるし、いつまで経っても――」

「あんた何言ってんの？ ひとりで」と母親が部屋の中から顔を出した。

　カラスはいつの間にか居なくなっていた。

11

「あああ……当機は……」だの「えええ……成田空港からの……」だの、機長に代わって副機長のわたしが説明する、と息巻いてアナウンスを始めたのはいいが、全然言葉が出てこないようでなかなか話が前に進まなかった。いや、もしかしたら英語に慣れてるからかもしれないと思って日本語ガイダンスが終わるのを辛抱強く待ってみた。しかしいつまで経っても、「あああああ……管制官のおお……指示がああ……(んんっと何だっけ？)」とひたすら何て言えばいいんだっけ状態で、やはり話が前に進まない。しまいには、話の途中で突然電話線を誰かに引き抜かれたかのようにマイクをオフにして話が止まり、何だ何だと思っていたら、何事も無かったかのようにマイクをオンにし話始めるというような始末だった。
　もういいや、と僕は思ってあの下敷きみたいなやつに書かれてある緊急時の対処マニュアルでも見ることにした。ベルトはギュっと締めて、酸素吸入は上から出てきて、救命胴衣はここにホイッスルが付いてて……というやつだ。
はたして酸素吸入が必要になる事態に陥った場合、僕は素早く吸入することは出来るのだろうか。隣りの席の人が間違えて僕の吸入機を取ったとしたらどうしようか。ああ、隣りの席に座っているのは外国の方だから、まず「エクスキューズ・ミー」と言う必要があるな、いやフランス人かもしれないから「パルドン」だろうか、それだと軽過ぎるから「エクセキュゼ・モア」かな、そんな時間あるかな、と考えていたらやっと英語のアナウンスが始まった。

「あああああ……Ladies and gentle……」
　……同じだった。
「えええ……This is…… ええええ……Narita air port……」
　結局こちらも前に進みそうになかった。

　まあ要約すると、「この時間帯は成田空港の到着路が混み合うから、管制官の指示で所定の時間より20分遅れで出発してねって言われました」ということのようだった。混み合うと分かってるなら最初からその時間を出発予定時刻にしとけよと思ったが、それよりも副機長のスピーチ力(という言い方が相応しいかは知らないけど)が物凄いなと感じた。
「いやいや、兄ちゃん。あんな、パイロットなんてな、ふん、飛ばすもん飛ばせればええんやで」と言われそうだけど。誰かに。
　まあしかし、やっぱりちょっとだけ練習した方が良い。本人のためである。

　出発が20分遅れたため、きっちり20分遅れでGK604便は成田空港に到着した。副機長はあれからひと言もアナウンスすることはなかった。
　やっと成田かよ、と思ったがここからが長い。何せ飛行機に乗ってる時間より、電車で家に帰

るまでの時間の方が明らかに長いのだ。それに……それに僕はあの例の陸上競技場みたいな合成ゴムの床を、ひたすら第二ターミナルに向かって歩かなければいけないことを考えるだけでうんざりだった。

　合成ゴムはすべての音を吸収していた。かなりの人数が同じ方向に向かって同じように歩いているにもかかわらず、そこには何の音もしていなかった。キュッキュッという音もザッザッという音でさえもだ。キャリーバッグのがらがら音が聞こえないだけでも大したものだった。
　色々考えてればあっという間に着くかなあと考えていたけれど、現在地を指す看板は、まだ半分くらいの場所を示していた。現在地なんてわざわざ表示するもんじゃない。「うへえ、まだここかよ」となるだけだ。「わあ、もうこんなに来たのか！ あとちょっとやんかあ」なんて思うわけがない。

　さて、猫は寂しい思いをしてるだろうか。
　ぶつくさ言わずに早く帰らなければ、と僕は思った。

気がつくと僕は故郷に帰る

http://p.booklog.jp/book/100852

著者：朔太郎
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/jedimaster/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100852

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100852

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ